

- 今日から受難週です。棕櫚の日曜日とも呼ばれているこの日、主イエスさまは二人の弟子を遣わし、ろばを連れて来させ、ろばに乗ってエルサレムに入場された。
- これは旧約聖書の預言（イザヤ書 62 章 11 及びゼカリヤ書 9 章 9 節）が成就するためだという。
 - ゼカリヤ書のこの言葉はユダヤ人にとってメシヤを意味していた。
 - 新約聖書はまさにそれが主イエスさまだという。イエスさまによって神さまの約束のことが成就したという。
 - 主イエスさまは神さまの愛を示す形でエルサレムの町へと入場された。
- 人々は上着を道に敷き、木の枝を切って道に敷いた。このようにして主イエスさまの入場を歓迎した。ヨハネ 12:13; 第二列王記 9:13
- 人々は「ホサナ」と叫び主イエスさまを迎え入れた。
 - 「ホサナ」とは「救いたまえ」という意味。いと高き神さまを讃え賛美する言葉であり、私たちをお救いくださいという懇願の叫びでもあった。救い主であるメシヤを神さまが遣わされたことを喜び賛美の声をあげた。
 - 人々は詩篇 118 篇 25-26 節のことが叫び、歓喜の声をあげて主イエスさまを迎え入れた。
- 人々は主イエスさまが行われた奇跡を見て、また語られた権威に満ちた教えの言葉に耳を傾けて、希望を託した。
 - このお方こそ自分たちをこの苦難な状況から救い出すことのできる力ある神だと捉えた。
 - だが、主イエスさまが同時に苦難の僕として来られるべきお方であることは理解できなかった。我々の身代わりとなって十字架にかかれる救い主であることの理解には至らなかった。それは想定外の話であった。あり得ないことであった。
- 目の前に、真の神、真の救い主がおられるにも関わらず、人々はこのお方の本当の姿を見ることはできなかった。もっとも 12 弟子の一人でさえ、普段からいつも生活と行動を共にしていたにも関わらず理解できなかったのと同じである。
- そして彼らは言った。「この人はガリラヤのナザレから出た預言者イエスだ。」と。
- 申命記 18 章 15-18 節
- 主イエスさまはこのように王として預言者として、そして祭司としてエルサレムに入場された。権威に満ちた勝利者としてではなく、むしろ柔和でへりくだった者として入場された。この時はまだ誰も悲劇的な退場をこの町からなさることに気付いていなかった。
- 主イエスさまのエルサレム入場は、神の御国の価値観がこの世界とは逆さまの価値観であることを示している。
 - 主イエスさまの歩み方全般が、この世界の追求する偉大さを覆そうとしている。権威を振るって人々を導くのではなく、人々に仕える者として人々の先を突き進まれる。永遠のいのちという希望への道を切り開くために、自らがこの世とは逆の道を進まれる。
- 主イエスさまは私たちを神の愛の交わりへと連れ戻してくださるお方である。
- カミュ『ペスト』が描き出す人間と社会の本質・脆弱性。根っこにある問題の解決はどうする。
- ピリピ人への手紙 2:10-11; ヨハネの黙示録 7:9-10; ヘブル人への手紙 13:5（申命記 31:6, 8; ヨシユア記 1:5）
- 私たちに罪の赦しと永遠のいのちを与えてくださる主イエスさまは私たちのためにエルサレムへと入場された。決して離れず、見捨てないお方。今週もこのお方の全てを覚えて歩み進みたい。